

和歌山県下で発見された特異な農用運搬具

A rare carriage-tool for farming found in Wakayama Prefecture

梅 室 英 夫

Hideo Umemuro

1. はじめに

東京農業大学図書館標本部においては、日本国内各地方から古農機具類の収集を昭和43年から継続して行なっている。昭和55年12月和歌山県における収集で、未だ報告されていない農用運搬具を発見したので、ここに報告する。

運搬具の原初形態は人力である。それは頭上運搬・肩担運搬・背負運搬・腰提運搬・手持運搬の五種類に分類されている。このうち肩担運搬には棒の一端に荷物をつけて一人で担うクジュウの方法、棒の両端にそれぞれ荷物をつけて一人で担うテンピンカツギの方法、棒の中央に荷物をつけて二人で担うサシニナイの方法の3通りがある。従来この肩担運搬法においては、米俵などでは、直接肩で担われ、その際には前掛類を肩に掛けたり、布切などで作った肩当が用いられる以外に、特に用具は使用されなかったと報告されている。しかしながら、筆者は米俵の運搬に使用する用具「ヒゴ」写真1を収集した。

2. 農用運搬具「ヒゴ」

2.1 収集記録

名称の由来については不明である。ただし御坊市においては、「ヒゴ」とはひごた（蜻蛉のつがい）ともいう。各部の名称も不明であり、前部と後部の区別はない。

標本番号 2860

収集日 昭和55年12月3日

収集地 和歌山県御坊市野口283番地

使用当時の地名 和歌山県日高郡野口村上野口283番地

寄贈者 田淵市郎右衛門 住所は収集地と同じ。

話者 寄贈者と同じ。明治29年2月26日生

2.2 所用者 田淵家

ヒゴを使用していた大正5年当時、水田1町歩 畑1町歩の耕作を行なう農家であった。水田は二毛作を行ない、裏作には大麦、小麦を栽培した。畑作としては大豆、甘蔗（野口砂糖と称して、大正7年頃まで栽培されていた）等を栽培した。

屋号をツキヤ（搗き屋）と称した。水車を所有し、近隣の農家の米を精白する精米所をも業としていた。さらに自家の余剰米の販売、農家から玄米を買入れ、搗精して販売も行なっていた。販売地域は主として飯米の自給不可能な日高郡川中村田尻、三佐等であった。白米は定期的に配達されていたが、時には特別注文によって配達されることもあった。白米は4斗入、一重俵の荷姿であった。白米1升は大正5年に20銭であり、現金を受取り、復路は空身であった。復路に炭を買ひ、御坊の街へ販売したツキヤもいた。因みに大正5年の玄米1俵は5円52銭である。

2.3 形状、製法

ヒゴの形状は見取図・写真1に示すごとく、全長100.0 cm、両端の幅4.5 cm、中央部の幅9.5 cm、高さ5.6 cm、凹部の長さ40.0 cm・幅4.5 cm・深さ4.0 cm、上面中央の反り1.0 cm、重さ825.0 gである。材料はクスノキである。ただし、時にはハゼノキを使用することもある。材料のクスノキは自家の山林より伐採し、村内の大工に製作を依頼した。その製作工賃は15銭位であった。

2.4 使用方法

米俵（4斗入、一重俵）を肩担運搬する場合に肩と米俵の間に狭み、使用する。写真2（写真の俵は複式）その場合、ヒゴの凹部は米俵の面に接する。米俵の封間の

原稿受理 1981年1月20日

* うめむろ ひでお

東京農業大学

ToKyo UNIVERSITY of AGRICULTURE

連絡先

〒156 東京都世田谷区桜丘1-1-1

長さは60.0 cmである。しかるに米俵はヒゴの凹部と反りにより、密着、安定する。使用者は担いだ側の手でヒゴの前部を握り、頭部と頸で米俵を支える。他の腕で歩調をとる。ヒゴを当てる機会として、直接米俵に当てて担ぐ方法と米俵を担いだ後に米俵に当てて担ぐ方法とがある。米俵は台を使用せずに自力で担ぐ方法に三種類がある。これを新潟県燕市松橋の方言で示すと、1. マキアゲ(米俵を地面に対して横に置き、その両端を持ち、膝から腹の上を転がすようにして肩に担ぐ)。2. フゲシまたはフガエシ(米俵を地面に対して縦に置き、上端を胸部につけて肩に担ぐ)。3. ミミツケ(2と同様に米俵を置き、逆さになって米俵を抱きかかえ、耳をつけて肩に担ぐ)である。これらの担ぎ方によってヒゴを米俵に当てる機会は1. 2では後者であり、3は前者である。しかし、ほとんどの場合、どの方法で米俵を担いでも後者により、ヒゴを当てた。米俵とヒゴを縄により固定するようなことも行なわず、さらに布団等の肩当も使用しなかった。

日高郡野口村上野口から川中村田尻、三佐まで、およそ5里の間道を、白米1俵運搬するのに、往路は6時間必要とした。途中1里毎に米俵を下して休憩した。この1里の間に担いでいる側の肩が疲労した時、米俵を下すことなく、両の手を使用して、背中側を廻し、他の肩へ担ぎかえた。この動作を繰返しながら1里の道のりを歩いた。復路は5時間を要し、日帰りした。

ヒゴ 見取図

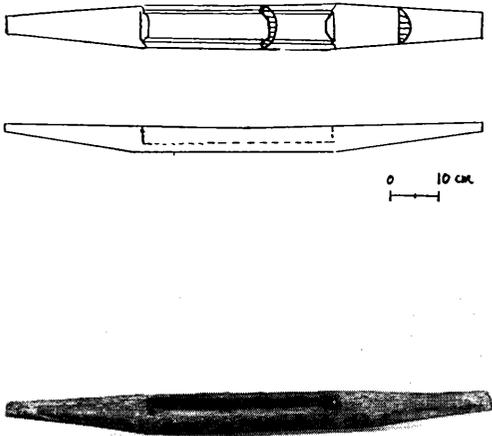


写真1 ヒゴ

この時、服装は腕抜き、テサシ、股引であり、草鞋、足半等を履いた。途中、降雨に備えて、常に米俵を被うための油紙を携帯していた。この地方における人力運搬は頭上、肩担ぎ、背負いが普通であり、女子は主として険阻な山の小径においては頭上、背負い運搬を行ない、男子は肩担ぎを行なった。稀に女子もヒゴを使用した。

2. 5 使用年代

野口村と川中村を結ぶ道路は大正5年まで日高川の川筋にあった。この道路は間路と呼ばれ、人のみが通行可能な小径であった。この小径は大正5年には改修が終り、猫車や大八車の通行が可能となった。それ以後、陸路において米俵の運搬はヒゴから猫車や大八車に変わった。なお、いつの時代からヒゴが使用され初めたかは不明である。

2. 6 分布

田淵市郎右衛門氏によれば、ヒゴは和歌山県下、全域で使用されていたという。さらに同氏が実弟から伝聞いたところによれば、上海、天津に出向いた折、男女ともに穀類を入れた俵をヒゴのような用具で運搬していたという。なお、この用具は棒状で凹部の有無は確認できなかった。

3. 類似の運搬具

3. 1 形態において類似した用具

土佐では材木を山から道路や川まで運び出すのにカタギマクラ(別名ボクリ)を肩に当てて担いだ。疲労すると杖を材木の下に当てて休み、肩を代えて運んだ。この用具の形状は長さおよそ90 cm、幅およそ15 cm、厚さ3 cmの板で、一方に肩当を縛り、他方にU字の取手を備えている。

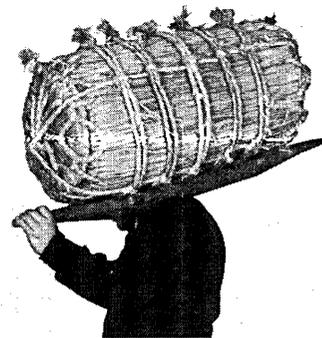


写真2 ヒゴの使用状態

また、南方より伝来したとされているカタゲウマが和歌山県日高郡、西牟婁郡の山間地方にある。これは合歡の木などの均整のとれた両又の枝を二本、あるいは一本を二つ割りにしたものに横棒を結びつけている。これは二又の間に炭材などの長い木を結束せずに乗せて運ぶことができ、さらに担いだ状態で身体を傾けるだけで下すことができる便利なものである。これと同じ形・使用法の用具を熊本県相良町四浦、初神ではカタゲウマといい、高知県ではノセという。その他、鹿児島県佐多町伊座敷、宮崎県五木村でも使用が確認されている。国外では台湾高雄州潮州郡ポンガリ社、交趾シナにも存在し、日本のものと形、使用方法も同じである。

3. 2 機能において類似した用具

奄美大島の宇検村において男は薪、材木、俵等の重い荷物を長い時間担ぐとき、ハネヤを使用する。これは荷物を担いでいない肩から荷物の下へ入れ、肩の一方だけへの重みを軽減させる用具である。このハネヤは肩を支点としたテコ棒である。

4 おわりに

ヒゴには二つの特長が考えられる。第一は構造として、中央の凹部と反りにより、米俵の安定をはかっている。第二は機能として、米俵を担いだ状態で肩の交代を可能としている。この方法はテンピン棒の場合と同じである。ヒゴについては、他地方における報告はない。ヒゴは発見されている肩担運搬具の中で特異とする用具であると考える。しかし、頭上運搬、肩担運搬（特にカタゲウマ）を行なう地域において、ヒゴが分布していたと仮定しても不思議ではないと考えられる。和歌山県における頭上・肩担運搬は他の地域と同様である。このことから、これらの運搬方法は潮流によって南方より伝来したとされている。しかし、運搬物である米俵は熱帯、亜熱帯地域において、使用されていない。それゆえに、ヒゴは日本独特な用具か、それとも稲の北方伝来説によるところの朝鮮半島より、由来したか、さらにヒゴに類似した用具が和歌山県に伝来された後に独自に工夫されたのか、これらのいずれかは現時点での判断は不可能であり、今後の研究課題である。

なお、本報告の作成に当たり終始ご援助下さいました東京農業大学総合研究所吉村典夫氏に対し、ここに謹んで感謝の意を表す。

〔参考文献〕

- 1) 桂又三郎 和歌山県日高郡農具絵図 中国民俗学会 昭和9年
- 2) 森彦太郎編 南紀土俗資料 複製版 名著出版 昭和49年
- 3) 佐藤庄五郎 図解わら工技術 富民協会 昭和34年
- 4) 和歌山県民俗資料緊急調査報告書 和歌山県教育委員会 昭和39年
- 5) 宮本馨太郎 民具入門 慶友社 昭和48年
- 6) 和歌山県誌 上・下 和歌山県 大正3年
- 7) 野田三郎 日本の民俗 和歌山 第一法規 昭和49年
- 8) 坂本正夫・高木啓夫 日本の民俗 高知 第一法規 昭和47年
- 9) 田中熊雄 日本の民俗 宮崎 第一法規 昭和48年
- 10) 村田照 日本の民俗 鹿児島 第一法規 昭和50年
- 11) 奄美諸島・種子島・屋久島 民俗資料調査報告書 鹿児島県明治百年記念事業事務局 昭和44年
- 12) Tadao Kano and Kokichi Segawa An Illustrated Ethnography of Formosan Aborigines. Tokyo Maruzen CO. LTD 1956.
- 13) 奄美 九学会連合奄美大島共同調査委員会 日本学術振興会 昭和34年
- 14) 郷土研究講座 4 生業 角川書店 昭和33年
- 15) 小野重朗 南九州民具図帖 昭和41年
- 16) 日本の民具 日本常民文化研究所 角川書店 昭和33年
- 17) くまの文庫6 熊野中辺路 民具 熊野中辺路刊行会 昭和49年
- 18) 台湾の農具 台湾の農具 台湾総督府殖産局 大正10年